

4月人権コラム

言葉の力

大阪教育大学 島崎 英夫

「セクシュアル・ハラスメント」という言葉が日本に渡来したのは1989年。その年の「流行語大賞」となりました。当時は、「性的嫌がらせ」という日本語訳がこの言葉に付きましたが、訳語は市民権を得ず、もっぱらカタカナ語として、あるいは「セクハラ」と略されて、人口に膾炙するようになりました。なぜ、「性的嫌がらせ」という言葉が市民権を持てなかったのか、それは、言葉としての新味やインパクトがなかったこともあるでしょうが、なにより正確でなかったからです。

「ハラスメント」には「嫌がらせ」という意味はありません。「ハラス (harass)」という動詞が名詞化して「ハラスメント」となったのですが、もともとの動詞「ハラス」はフランス語として生まれました。フランスの貴族たちが狩りに出かけて、獲物を見つけたときに猟犬をけしかける掛け声が「harass」だったのです。フランス語ではhとsを発音せず語気や語勢として表現しますので、harassは口にすると「アラーッ!」となります。この掛け声をかけるときのフランス貴族たちには、そして掛け声をかけられた猟犬たちには、気持ちの高ぶりはあっても「嫌がらせ」の気持ちなどないことでしょう。しかし、獲物と目指されたウサギたちはどうでしょう。命に関わるパニックに襲われて、この掛け声を聞くことと思います。獲物となるウサギたちの立場に身を置いたときの戦慄を表すものとして「ハラスメント」という言葉は誕生しました。

この言葉も、日本社会に位置づいて三十年以上となりました。しかし、いまだに意味を正確に把握して使われていないことがよくわかる事例が、この二月にありました。ある人物が、新たに五輪・パラリンピックの組織委員会会長になった人の過去の「セクハラ」事案について「セクハラと思ってやっているわけではない、当たり前の世界だ」「彼女にセクハラという意識はない」と擁護したという報道を見聞きして、時代劇によく出てくる悪代官とこの政治家の顔が、わたしにはダブって見えました。時代劇の悪代官たちが町娘を手籠めにするときに発する「オラ、オラー」という叫びが「harass (アラーッ)」とダブるのです。悪代官たちには「セクハラ」の意識はありません（しかし、悪代官にもフランスの貴族にも、「他者の生き方に影響を与えられる」全能感のようなものはあったでしょう）。意識どころか、この言葉自体がありませんでした。

1989年になって初めて、狩られるウサギ、手籠めにされる町娘の気持ちを表す言葉がやっとできて、輸入されたのです。

そもそも五輪・パラリンピックの組織委員会会長交代劇も、前会長の発言の底にあった女性蔑視が公になってのことでした。日本社会も、やっとジェンダー平等が大きな組織を揺さぶるような重い課題として認識されるようになってきました。そのこと自体は歴史の進歩にとって良いことだと思います。と同時に、生半可な知識を人前で話すことが往々にして重大な局面をもたらすことを改めて認識させる事例であったとも

思います。

目の前にいる人に思いを伝えるために、その人の前でクルリと後ろを向いて地球を一周してくるほどの手間暇をかけないと、ほんとうの自分の気持ちは伝わりません。コミュニケーションのために、人間はどうしても言葉という松葉杖に頼らねばなりません。松葉杖も使い方を誤れば凶器にもなります。いままで表せなかった気持ちを表現できるようになるのも言葉の持つ力ですが、生半可な言葉遣いが人間関係を断絶するように働いてしまうこともあります。このことは、わたし自身、四十年以上教壇にたって、人前で話をしていて、いつも感じることです。言葉をきちんと使えるように、その努力は生きている限り続けようと思っています。